

オープニングメッセージ

吉本ばなな



よしもと ばなな ● 1964年、東京生まれ。87年『キッチン』で第6回海燕新人文学賞を受賞しデビュー。著作は30か国以上で翻訳出版され国内外での受賞も多数。近著に『下町サイキック』。noteにて配信中のメルマガ「どくだみちゃんとうしばな」をまとめた文庫本も発売中。

すごく寂しいけど

この子は私とは「違う」から

「そうか、ここから先は『彼の人生』で、私が考えるべき問題ではないんだな」

そう気づき、ちよつとがんばって子どもの手を離したのが、私の子どもが17、18歳になるくらいの頃でした。

当時、子どもがアルバイトにずいぶん打ち込んでいる姿を見て「それを仕事にすれば良いんじゃない」と声をかけたことがあります。すると彼は「向いていることと、仕事にしたいことはまた違う」と。親としては「それなら、もつと将来の仕事につながるようなことに時間を使えば良いのに」とじれったい気持ちもありながら、そういうことじゃないんだ、と思いました。私とは考え方が違うのだと。だったら、その違いを尊重しなければいけないと感じたのです。

同じ頃に、毎日の晩御飯をどうするかを、子どもが自分で選んで良いことにしました。子どもの「自分の時間」を尊重しなければいけないと思ったからです。もちろん家でどうせ用意するのだから、親としては一緒に食べたほうが楽です。でも、親の都合で、いつまでも子どもみたいに扱うのは気の毒だと思つて。選択肢を手に入れて、彼はとても喜びました。

子どもの手を離すと思うと、心配だし、すごく寂しい。でも私が寂しい、寂しいと言っているうちに、子どものほうが勝手に離れていくべき。「言う」と親がまた心配するから」なんて秘密をもつかもしれない。でもそれくらいの関係のほうがいいのだ、と思うようになりました。

「自立」というと生計を立てることのように思われがちですが、本当は心の問題だと思えます。自分が「自分だけで生きてい

く」と決めているかどうか。自分で自分の問題を解決したことがあるとか、誰にも言わないことをもっているとか、そういうのが自立の象徴なのでしょうね。だから小学生でも自立している人はいるし、大人の中にも自立していない人はいます。思えば私も本当に自立できたのは40歳すぎからでした。

もちろん、すべての人が自立しなければいけないとは思いません。一生何かに頼って生きていけるのなら、それも良いでしょう。ただ、みんながいいねと言う会社に入れば一生安泰、というわけでもない、過酷な時代です。意志をもつことを決めた人は、時に空気が読めないと疎まれたり、排除されそうになったりしながらも、自分の足で立つて歩いて行かなければいけない。そのためにも、それぞれが自立についてはよく考えた方がいいですね。

取材・文／塚田智恵美 撮影／Fumiya Sawa（プロフィール写真）

子ども時代を取り戻して 本来の自分に戻っていく

私の子どもが16歳まで在籍していたオルタナティブスクールでは、学校内での決めごととはすべて子どもたちの話し合いによって行われることになっていました。なかには話し合いに参加せずお喋りばかりしている子もいたけれど、その子も、自分にとって大切なこととなると、ちゃんと意見を言います。ああ、こうやって放っておくと、何とかなるものだと思います。自発性が命なのです。

人にはもともと、向き不向きや、これは譲れないという考えがある。でも自分のことがすぐにわかる人はなかなかいません。だから焦らずに、高校・大学の7年間は、子どもにほんやりできる時間をあげると思っていますか。その「ほんやり」

のなかで、子どもは自分の向き不向きや、この先どういう方向に進みたいのかを考え始めるのだと思うのです。

人間に限らず生き物はみんな、小さな赤ちゃんのときから結局変わらないのだと私は思います。だから大きくなった後に大切なのは、子ども時代を取り戻して、本来の自分に戻っていくことです。本来自分に向いていることや、自分がしたいこと、進みたい方向、そういう「自分」というものを取り戻していく。

それは子どもだけでなく、親にも言えることです。これまで子育てや親の介護など、他の人に向いていた矢印を少し自分に向けてみて「自分は本来、どういう人間だったのだろうか」と向き合ってみてはどうでしょうか。

親御さんに「私って、どういう子どもだった？」と聞いてみてもいいですね。私も聞

いてみたことがあります。「甘えるにも気がつかう子だった」と言われて、なるほど、私らしいと思いました。

「髪の毛を伸ばすことにこだわっていた」「果物ばかり食べていた」など、どんな意味があるのかわからないようなこと。その行動やこだわりのなかに、意外と自分らしさのヒントがあるようにも思います。

「同じクラスのあの子はもう予備校を決めたいから、うちもがんばらないとダメだ」などと、つい人と比べて焦りがちですが、「ここから外れたら大変なことになる」という考えを外して、自分というものを知ってみると、意外と何とかなるものです。ダイエットと同じで「みんながジムに行っているから行かない」と無理をするよりも、「私はのんびり歩くのが向いているかも」と自分らしいダイエット法を見つけたほうが、うまくいきますよね。

子ども親も「自立」のとき



下町サイキック
吉本ばなな
河出書房新社

「友おじさん、どうして人は色とかお金とかに目がくらむの？」サイキック能力を持つ中学生のキヨカと、近所に住む友おじさんの、ささやかだけれどかけがえのない連帯。人がそれぞれの力を発揮して生き抜くための、知恵と哲学が詰まった最新長編！